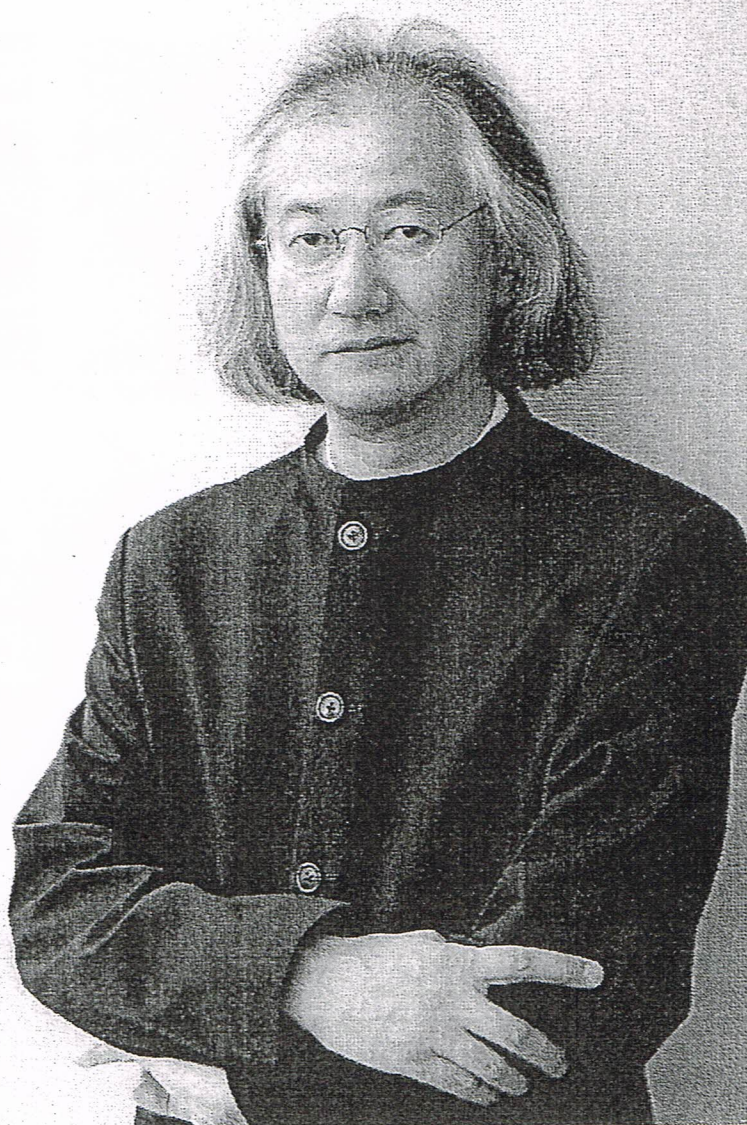
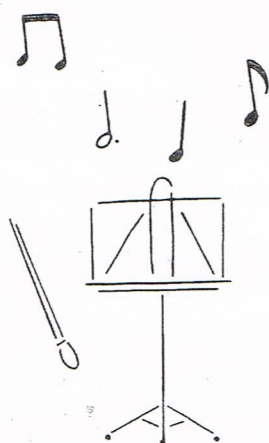


三重の友



© Concerto



マエストロ 矢崎彦太郎

三重県を初めて私が訪れたのは、58年前、1965年の夏だった。鎌倉育ちなので、それまで関西方面とは殆ど縁がなかったが、幼稚園から一緒だった仲間に、安政元年(1854)和歌山西部の広村(現在の広川町)を津波が襲った際、借り入れたばかりの稲に火を放ち、豊作に浮かれ躍り捲る村民を気づかせて危機を救った庄屋、濱口梧陵の末裔がいた。「稲叢の火」として伝わる史実である。まだ数式と睨めっこしていた大学1年の夏休み、前年に開通した東海道新幹線には乗った事がなかったから、他の友人と一緒に名古屋まで乗車し、紀伊半島を一周する旅を計画した。二見浦・伊勢神宮・那智勝浦・白浜温泉・和歌山近郊の湯浅町にあった濱口篤志君の旧家・高野山等をのんびり巡った弥次喜多珍道中である。

三重フィルハーモニー交響楽団が第1回定期演奏会で産声をあげた1972年は、私が初めて日本を離れてヨーロッパに向かった年。過ぎ去った人生の3分の2余りは、ヨーロッパと日本の二重生活で、この状況は現在も続いている。ヨーロッパの拠点は、ウィーン・ローザンヌ・ロンドン・パリと移り、ドイツのホフ交響楽団で音楽監督等に携わっていた10数年間は、パリ・ホフ・東京が3拠点であった。三重フィルにとっても私にとっても、1972年は大きな出発点であったから、偶然とは言い切れない因縁を感じる。

三重フィルの定期演奏会を振る前にも、日本アマチュアオーケストラ連盟全国大会の沖縄公演や札幌公演で三重フィルのメンバー数人と知り合い、その交友関係は2000年と2003年の三重フィルを中核に据えた三重音楽発信への出演に実を結んだ。三重フィル定期演奏会としては2006年の第35回が初出演で、以後三重音楽祭や熊野・亀山公演も含めると、14回程共演している。三重フィル事務局長の櫛田誠氏が纏めた私の演奏会記録によると、時代的には古典からロマン派を経て近代まで、地域的にはフランス・ドイツを



2003 マラー交響曲第3番



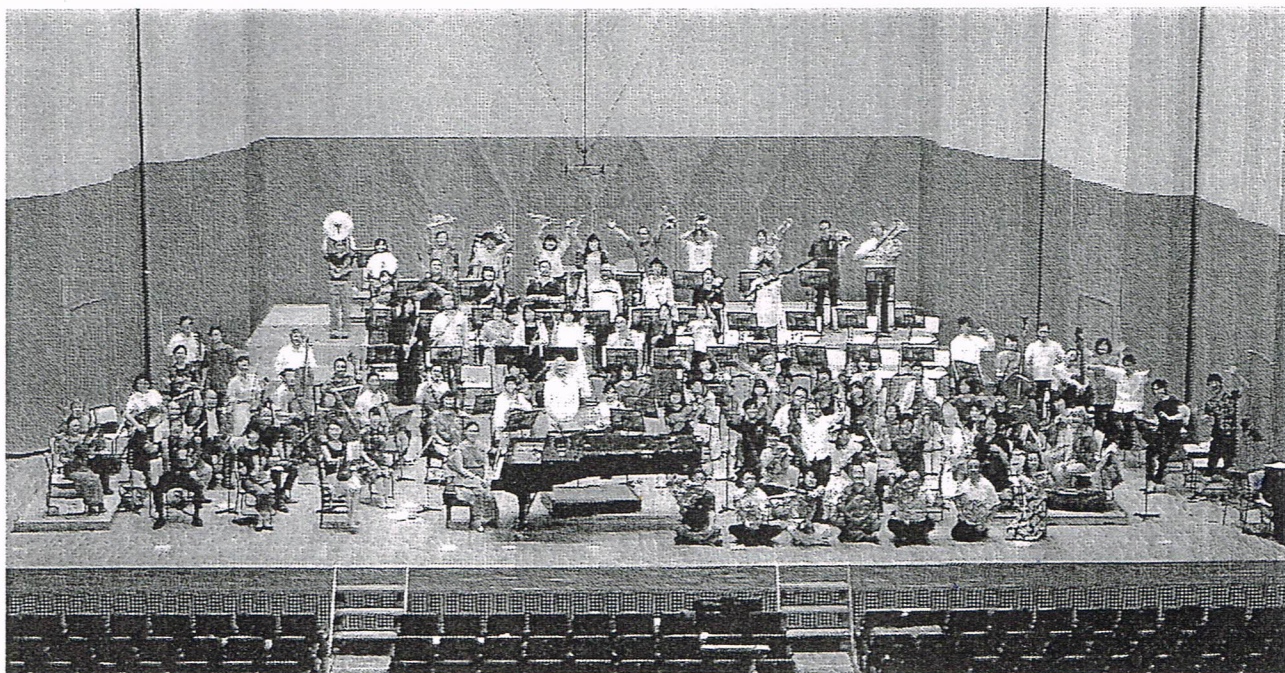
マエストロ70歳のお祝い

中心にヨーロッパとアメリカの多彩な曲をプログラムに取り上げてきた。とは言っても、フランス作品ではラヴェルが意外に少なく、フランスやデュカの交響曲も演奏していない。ドイツ物では、シューベルト・メンデルスゾーン・シューマンが欠落しているし、一般的なアマチュアオーケストラの定番であるチャイコフスキーは1曲も含まれていない。楽曲の研究・分析を積み重ねても、実際の演奏行為を経験することによって判ることが音楽には多いので、今後のプログラミングの参考にしたいと思っている。「一つの作品を前にして、プロ・アマの区別は存在しない。」が私のモットーである。各作品と真摯に向き合い、個々の作曲家の語り口に馴染んで作者と対話を重ねる事によってこそ、音楽芸術全般への理解も深まる。

三重フィルの利点の一つに音響効果が素晴らしい三重県文化会館の存在がある。演奏会場はオーケストラ全体の響きや音色を決定づける楽器の一部なのだ。練習会場にしても、津市郊外でたびたび使用するいくつかのホールは中くらいの大きさだが、客席もあるので、音響空間の容積はかなり広く、オーケストラの音作りに大きな支えとなっている。東京のアマチュアオーケストラでは考えられない恵まれた環境である。

フランスの作家ブルーストが著書『失われた時を求めて』で述べているように、「もし言語の発明、言葉の形成がなかったら、音楽だけが魂と魂のコミュニケーションを可能にする唯一の例」である。このコミュニケーションは時空を超越しているから、150年前ウィーンに居たブラームスのメッセージを津の人々に今、伝えられるのだ。50年の経験を踏まえた三重フィルの面々には、より深い共感をもって作曲家のメッセージに接し、そのコミュニケーションに励んで戴きたい。

種々の制約がある中で50年の節目を迎えられた三重フィルの御健闘を称えらるとともに、今後尚一層の御発展を大いに期待し、願ってやまない。



2019 第48回定期演奏会